

液中の糖分は着実に減り、二、三時間もすると犬は立ち上がりつて尾を振るほどになつた。ほとんど奇跡に近かつた。物質Xはあつたのである。この物質は初めてアーレッティンと名づけられたが、のちにマクロード教授の提案でインシュリンと

ガンで片足を失くしたカナダの青年が、およそ五ヶ月をかけて走り抜いた。途中でガンが肺に転移しなければ、おそらく予定通りカナダの東端から西端まで八千三百余キロを完走していただろう。ガン撲滅のために。そして自分自身のために。

「私は夢を見ているのではありません。これ（マラソン）によつてガンに対する確実な答えや治療法ができるとも私は考えていません。しかし私は奇跡を信じます。信じなければならないのです」——テリ一は、このように述べて支援を仰いだ。

になつたこともあつた。
それでも彼は走り続けた。やがて、彼の行動に感激した人々から寄付が集まってきた。沿道の市町村が、いろいろな団体が、そして一般市民が寄付を申し出た。ラジオやテレビが特別番組を組み、テリーの呼びかけを応援した。

翌年一月、レオナード・トムソンとい
う、二年間も糖尿病をわずらい、体重も
三〇キロに減つてあと一二、三週間しかも
たないだろうと思われていた十四才の少
年に、インシュリンが注射された。糖尿
病にかかつた人間への、初めてのインシ
ュリン注射である。

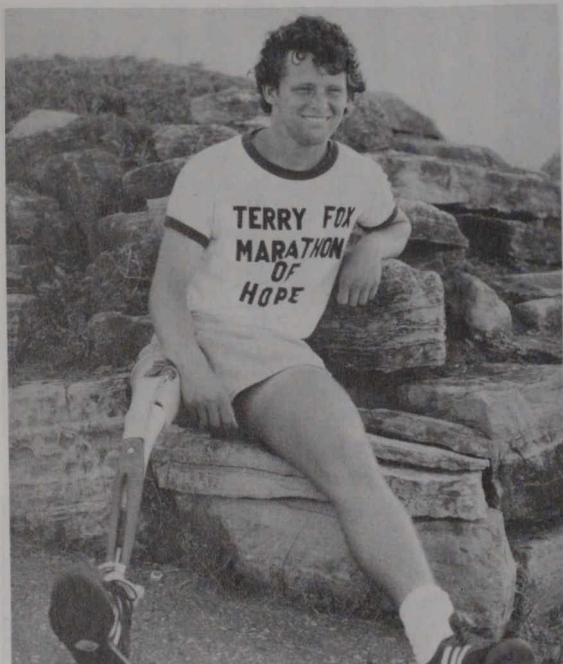
テリーが右足をひきのすぐ上から切断されたのは四年前、十九才のときである。運動神経が抜群で、通学していた高校でその年の最優秀スポーツマンに選ばれたばかりだった。ある日、右足に痛みを感じ、それがガンのせいだと分り、三日後に切断された。スポーツ方面に進みたいという彼の夢は、一夜にしてくずれてしまつた。

当初は、いつたんこうと決めたらやり通す彼の頑固さを知っている父親でさえ、「本気か」と驚いたほどだったが、家族やガン協会を中心に、周囲の理解も高まつていった。

しかし「希望のマテソン」は予定の三分の一を過ぎた北部オンタリオの路上で中止となつた。息をするのが苦しく、胸に痛みを感じたからである。ポート・アーサー総合病院で検査した結果、左肺が一部つぶれていることが分つた。ガンが肺に転移していたのである。テリーは間もなくブリティッシュ・コロンビア州の病院に移され、化学療法を続けている。

トムソン少年は、まもなく元気を回復し、普通の食事がとれるようになり、そげた頬もふくらんだ。彼はあと十三年も生き延びたが、死んだのは糖尿病のせいではなく、オートバイ事故のあとにかかるつた肺炎が原因だった。

一九二三年、バンティングにノーベル賞が授けられた。彼はその賞金を、ペス



テリー・フォックス

五、○○○キロ走破 ガン撲滅のために片足で

五千三百キロ、というと、いかにマラソン選手でもためらう距離だ。それを、

革新的大理論

マクルーハン

のスタートを切ったのである。それから後は、雨が降つても雹が降つても、走り続けた。義足は何度もはずれ、痛み続けた。トラックがびゅんびゅん飛んできて、道から落とされそう

トロント大学教授のマクルーハンは謹厳で生真面目な人物である。六〇年代の